

■研究十二月往来〈306〉

——世阿弥生誕六五〇年記念企画——《第一回》

「世阿弥」はどれだけわれわれのものになっているのか

天野文雄

歴史は未来のみならず、過去にも延びるものだが、昭和三十八年の世阿弥生誕六百年の年に発表された表章氏の「世阿弥の生涯をめぐる諸問題」〔能楽史新考(二)〕から五十年、この間、われわれはどれだけ世阿弥の事績に近づいたのか。そもそも、昭和三十八年を彼の生誕六百年とし、今年を六百五十年とする説にも有力な異説があり、一般には嘉吉三年(二四四三)としている没年も、八十一歳としている享年も確定的なものではない。生涯の大事件だった佐渡への配流も、その理由や帰還の成否についてはいまだに定見がない。彼の事跡を伝える確実で具体的な史料は少年期が多く、至徳元年(二三八四)に駿河で客死した父観阿弥から観世家を継いでからの史料は、数も少なく断片的である。

われわれはそうした限定された史料と彼の執筆になる芸論によって、能役者として生きた彼の事績を考えてきたのだが、どの分野にもあるそうした宿命的な制約もあって、その栄光の少年時代、今熊野猿楽の時と場、世阿

弥の勸進能として唯一知られる一条竹ガ鼻勸進猿楽の場所、義満時代における世阿弥の御用役者としての位置、とりわけ犬王との関係、応永十五年(一四〇八)の後小松の北山第行幸における世阿弥の動向、世阿弥と禅の関係、とりわけ思想的な影響を受けはじめた時期、あるいは禅思想の芸論や作品への影響、また、私生活においては、世阿弥が後継者としていた甥三郎元重(音阿弥)との相克、さらに元雅、元能、そして女婿金春大夫氏信(禪竹)の教導、応永二十九年初頭ころと目される出家後の活動、などが考究され、それぞれに多くの成果を得てきたのだが、これらにはなお論者によって見解を異にする問題も少なくない。

ここでは、それらについて述べる余裕はないが、このうち、犬王との関係について言えば、この五十年のあいだに発掘された複数の南北朝期の犬王関係資料によって、義満時代の御用役者筆頭は犬王とみるのが妥当であり、とすれば、義持時代の第一人者は確実に田楽の増阿弥であるから、世阿弥は生涯を通

じて、御用役者としては第一人者であった時期はなかったことになる。また、一条竹ガ鼻での勸進能については、近年、その場所を従来の上京区ではなく北区の北山第真南の地とする確度の高い見解が日本史研究の細川武稔氏によって提示されているが、それをふまえると、これまでまったく問題にされていなかった同勸進能の目的にもある展望が得られそうな感触を筆者は得ている。また、従来は永享六年(一四三四)の佐渡配流以後の活動については、ほとんど考察の対象とされていなかったが、彼の晩年は配流後も十年はあったらしいから、その時期のことも念頭に置く必要がある。その場合は、やはり能作が問題となるが、それについては生駒宝山寺蔵「世手跡能本三十五番目録」所載曲の作品論からの検討がさしあたっての課題かと思う。

もちろん、「世阿弥」をわれわれのものとするには、その事績だけでなく、彼が制作した能の演劇的芸術的分析、彼の芸論についての思弁的な面からの究明、それらを総合しての世阿弥の芸風の究明が必要であるが、これらについては、それぞれ時期による違いがあることにも留意する必要がある。いずれも困難ではあるが、重要にして意義ある課題である。また、これらの課題に答えることは、「能」の演劇的芸術的価値の測定ともなっており、「能」が世界無形遺産に認定された、その根拠を内外に示すことにもなる。

このうち、世阿弥の能の研究も、この五十年で大きな進展をみている。もちろんそれは

能の作品論の進展ということでもあるのだが、今思いつくままにその成果をあげるならば、第一に世阿弥の時代には常識となっていた『古今集』や『伊勢物語』などの注釈書発掘を中心とした典拠研究、第二に体系的な伝本研究の成果による原形の復元研究とそれに伴う変遷研究、第三に能の音楽構造に立脚した作品研究、第四に世阿弥の作品相互の影響関係、あるいは世阿弥作と他作との影響関係、第五に披見が容易になった能伝書、囃子伝書を活用しての演出研究、第六に世阿弥の脇能の制作事情、などとなるか。世阿弥の能の研究はこれらが複合して進められてきたのである

が、私見によれば、こうした方法による成果は一段落を告げ、現在は新たな方法あるいはテーマの発掘に向けての模索の時代に入っているように思う。思えば、昭和三十年代から約三十年ほどのあいだは、法政大学能楽研究所を中心とする科学的でそれゆえに清新な研究が能楽研究全体に飛躍的な成果をもたらした時代であった。そこに収集された能楽資料によって、それまでの能や狂言についての常識が覆され、新見が陸続と発表された時代であった。それが上記のような世阿弥の能についての研究成果ともなり、並行して各種「謡曲集」の刊行もあったのだが、そうした黎明期特有の疾風怒濤の時代は永遠には続かないもので、現在の世阿弥の能の研究は、能の作品研究全体と同様に一種の袋小路に入っているというのが筆者の認識である。これはあくまでも筆者の認識であるが、かりにそうだと

すれば、その原因はなにか、それを打開するには何が必要なのであろうか。

まず、上記のような各種の世阿弥の作品論の多くが、『高砂』なら『高砂』という作品の「部分」の解明にとどまり、『高砂』全体の解明にまで及んでいないこと。いうまでもなく、「部分」の集積はかならずしも「全体」の構築とはならないのである。「部分」の成果は成果として、それとともに、『高砂』がいかなるテーマをもった能で、そのテーマ実現のためにいかなる演劇的工夫が凝らされているかが総合的に考究される必要があるということである。

『高砂』は『古今集』の注釈書である『古今和歌集序聞書(三流抄)』等の説の影響を受けているという指摘は文句なしに画期的だったが、もちろんそれで『高砂』論は終わるわけではない。そうした指摘をふまえた総合的な把握によって、はじめて『高砂』が芸術としていかなるレベルにあるのかという、演劇研究としての最終的な問題(それは一面では基礎的な問題でもある)に立ち至るわけだが、そうした面での考究がなされずに、「世阿弥による能の大成」が自明のこととされているのが世阿弥研究の現状かと思う。

もう一つは、能楽研究全体の細分化である。これはどの分野においても顕在化している不可避の現象で、能楽研究もその例に洩れないのだが、世阿弥の能の研究もそうした潮流の影響を大きく受けている。世阿弥の能の作意(主題や趣向)を正確にとらえるには、それをとりまく中世の文化や社会、あるいは世阿

弥の能の基盤である和漢の古典への目配りが必要なのだが、研究の細分化によって、それが急速に困難になっている。皮肉なことだが、これには前述した能楽研究所の充実(それは能研に通っていれば安心という雰囲気醸成と表裏一体であったと体験的に思う)や、平成十三年の能楽学会の創設(学会は能楽学会だけという研究者も少なくないらしい)が「双刃の剣」となった面もある。その一方で、戦後の能楽研究が積み上げてきた成果に抛らない「大らかな」世阿弥の作品論があいかわらず少なくとも、もちろんこれは論外で、われわれが世阿弥の能の研究にとるべき道は、これまでの能楽研究の成果をふまえつつも、細分化の弊に陥らない視野の広さに求めるしかないのである。

世阿弥の芸論の研究は、この五十年に限って言えば、なんとといっても日本思想大系『世阿弥禅竹』(昭和四十九年、岩波書店)に結実した、現存する世阿弥の芸論二十一点の校訂をあげなければなるまい。これに加えて、香西精氏による世阿弥の芸論用語の読解、表章氏による『風姿花伝』の形成研究(増補研究)がある。いずれも画期的と評しうる業績だが、これらはいわば基礎研究であり、研究の順序としては、そこから新しい世阿弥の芸論研究、すなわち芸道という思想研究がスタートするはずであった(『世阿弥禅竹』が日本思想大系という叢書の一冊であることを想起されたい)。しかし、現実にはそうはならず、その方面の成果は希少という状況にある。そうなったについては、戦前の能楽研究の中心だった世阿弥の

芸論研究の多くが『世阿弥禅竹』の出現によってその論拠を失う結果になり、その反動として、世阿弥の芸論の思想研究の可能性や意義に大きな疑問符が付されたためかと思うが、やはりこの方面の研究は、「世阿弥」をわれわれのものとするためには不可欠であろう。

さいわい、この課題に向けては、恰好のお手本が存在している。昭和三十六年刊行の小西甚一氏の『能楽論研究』（塙書房）がそれである。同書は『世阿弥禅竹』以前の著作だが、『世阿弥禅竹』に結実する校訂本文を収めた日本古典文学大系『連歌論集能楽論集』に拠って、世阿弥の芸道思想の特色とその変化を整理した、読みごたえのある、豊かな著作である。そこでは、世阿弥の芸論の読みに加えて、中世の和歌や連歌、さらには宋詩や仏典との関係にも留意しつつ、世阿弥の芸道思想の変遷が、「花は心」「花が能の命」「心の深まり」「習道の体系づけ」「具体性を超えること」といった確なテーマ設定に沿って説かれている。世阿弥の芸道思想については、このような研究が『世阿弥禅竹』で提供された信頼しうるテキストをふまえて、新たになされる必要があると思うのである。

これでこの五十年を中心にした「世阿弥」研究の軌跡と今後の課題についての素描を終える。五十年後の生誕七百年では、いかなる総括がなされるかは想像がつかないが、海外の研究者による研究成果がその一郭を占めることになるのは確実のように思われる。

（大阪大学名誉教授）